

修士論文(要旨)

2017年 1月

大学生の友人関係, 信頼感と孤独感との関連

指導 井上 直子 教授

心理学研究科

臨床心理学専攻

215J4001

相河 真帆

Master's Thesis (Abstract)

January 2017

How Friendship and Trust Relate to Loneliness among University Students

Maho Aikawa

215J4001

Master's Program in Clinical Psychology

Graduate School of Psychology

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor: Naoko Inoue

目次

1. 問題の背景と所在.....1

2. 目的.....1

3. 方法.....2

4. 結論.....2

引用文献

1. 問題の背景と所在

本研究では、青年期の不適応の指標としての否定的側面としての孤独感に着目する。Permlan & Peplau(1986)は、孤独感に関する研究を振り返り、その内容は、3つの点で考え方が一致していると述べた。第1は、孤独感は個人の社会的関係の欠如に起因するということ。第2は、孤独感は主観的な体験であること。そして第3は、孤独感の体験は不快であり苦痛を伴うこと、である。

青年期の孤独感と関連のある要因の研究は様々にあるが、本研究で注目するのは青年期の発達において重要となる友人関係との関連である。青年期は、第二の分離・個体化期(Blos, 1962)とされ、青年が親から心理的に分離し、一個の独立した個体となる過程の時期である。皆川(1980)は、第二の分離-個体化過程において、親に代わる依存愛情欲求・同一化の相手として同性の友人との相互依存の関係を形成することを指摘している。榎本(1999)も、これまで親中心であった状況から、自立する過程の時期を乗り越えるには、悩みや考えを語り合う同世代の友人が必要となることを指摘した。

このような青年期における友人関係の重要性を考えると、友人関係が持てなかったり、その関係のあり方が望ましいものでなかったりすれば、自己概念の獲得が阻害され、否定的側面としての孤独感を高める可能性があるであろう。さらに、友人関係の質に関連する要因として良好な対人関係や親密性に関連があるとされる信頼感(金子, 1994)が与える影響を検討する意義があると考えた。

2. 目的

本研究では、性差の検討を前提としたうえで、友人関係の在り方を「友人との活動」と「外発的動機」「内発的動機」からなる「友人関係への動機づけ」の2側面から捉え、その「孤独感」への影響を検討する。また、その友人関係の在り方が「孤独感」に及ぼす影響において「信頼感」がどのような役割を果たしているのかもあわせて検討する。そのために以下の仮説に基づく仮説モデル(Figure1)を作成し、性差も踏まえたうえで仮説モデルの適合について検証する。

仮説1 : 友人関係の在り方、信頼感、孤独感には性差がみられる。

仮説2 : 「信頼感」が高いと、「友人との活動」と「友人関係への動機づけ」が高く、「孤独感」が低い。

仮説3 : 「信頼感」と「友人との活動」の間には、正の関連がある。なお、「信頼感」から「友人との活動」へのパスと、「友人との活動」から「信頼感」へのパスの両方が考えられるため、モデルを比較して決定する。

仮説4 : 「孤独感」は、「信頼感」、「友人との活動」と「友人関係への動機づけ」が低いと高い。

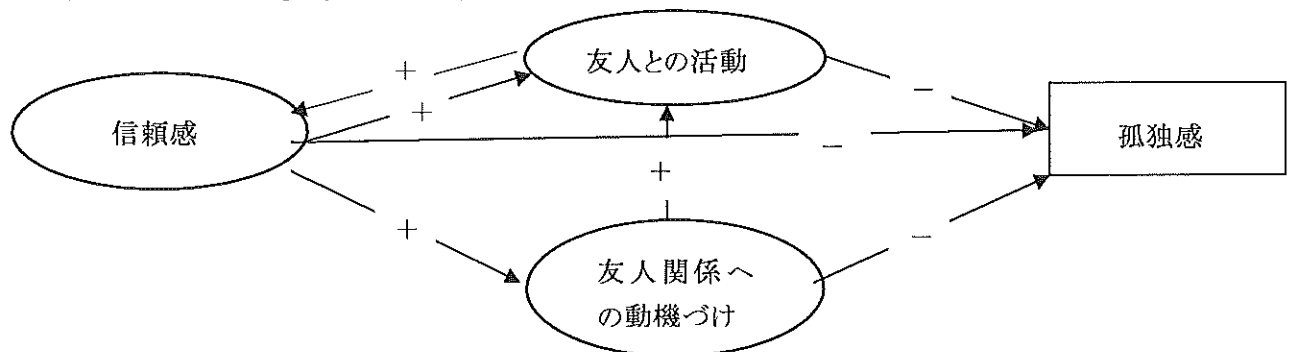


Figure1 仮説モデル

3. 方法

本研究は、桜美林大学研究倫理委員会の承認を得て行った。(2016 年 8 月承認 NO. 16007)

18 歳から 24 歳の大学生を対象に質問紙調査を行った。

質問紙は以下の通りである。

① フェイスシート

対象者が指示通り、青年期にあたる 18 歳から 24 歳の大学生であるかどうかを確認するための年齢と学年、性差を検討するための性別を問う項目の 3 項目でできている。

② 友人との活動尺度(榎本, 1999)

③ 友人関係への動機づけ尺度(岡田, 2005)

④ 改訂 UCLA 孤独感尺度(諸井, 1991)

分析には SPSS Ver22.0 および Amos Ver22.0 とを使用した。分析方法は、以下の通りである。

(1) 友人との活動尺度、友人関係への動機づけ尺度、改訂版 UCLA 孤独感尺度、信頼感尺度の 4 つの尺度の因子構造を確認するため、因子分析を行った。

(2) 各下位尺度得点の性差を検討するため、 t 検定を行った。

(3) (1) (2) の結果を踏まえて相関分析を行った。

(4) (1) (2) (3) の結果を踏まえて共分散構造分析を行い、仮説モデル図の適合度の検証を行った。

4. 結論

仮説 1 が支持され、男女で異なるモデルが完成した。仮説 2 は女性では支持され、男性では一部支持された。仮説 3 は支持され、男性では「友人との活動」から「信頼感」へのパスが示され、女性では「信頼感」から「友人との活動」へのパスが示された。仮説 4 は女性においてのみ支持された。

具体的には、男性は、「友人との活動」が多いと「信頼感」が高く、「信頼感」が高いと「孤独感」が低い。女性においては、「信頼感」が高いと「孤独感」が低い他に、「友人との活動」の多さや「内発的動機」の高さも「孤独感」の低さと関連する。また女性は「外発的動機」が高いと「孤独感」が高いことが示された。さらに女性では「友人との活動」「内発的動機」「外発的動機」それぞれが「信頼感」と関連することが示された。このことから、女性は、信頼感が友人関係の在り方と孤独感の基盤となっている可能性が示唆されたといえる。そのため女性では、友人と関わる行動を促すだけでなく、信頼感や内発的動機づけを高め、外発的動機づけを低める要因の検討が、孤独感の低減にとって重要であろう。一方、男性では、友人と関わる行動を促すことが、信頼感を高めて孤独感を低減させる可能性があることが示唆された。

引用文献

- 天貝由美子 (1997). 成人期から高齢期に渡る信頼感の発達—家族および友人からのサポート感の影響, 教育心理学研究, 45, 79-86
- Blos,P.(1962). On Adolescence:A Psychoanalythic Interpretation.The Free Press of Glencoe,Inc
(ブロス,P.野沢栄司 (翻訳) (1971). 青年期の精神医学, 誠信書房,)
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化, 教育心理学研究, 47, 180-190
- 金子俊子 (1995). 青年期における他者との関係のしかたと自己同一性, 発達心理学研究 6,41-47
- 皆川邦直 (1980). 青春期・青年期の精神分析的発達論ピーター・ブロスの研究をめぐって 小此木啓吾 (編) 青年期の精神病理 弘文堂
- 諸井克英 (1991). 改訂 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討, 静岡大学人文論集 42, 23-51
- 岡田涼 (2005). 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討—自己決定理論の枠組みから, パーソナリティ研究, 14, 101-112
- Peplau,L.A.&Perlman,D.(1982). LONELINESS:A SOURCEBOOK OF CURRENT THEORY AND THERAPY, John Wiley&Sons,Inc.
(L.A ペプロー, D.パールマン編/加藤義明 (監訳), (1988). 孤独感の心理学, 誠信書房)